

手足の不自由な子どもたち

# はけみ

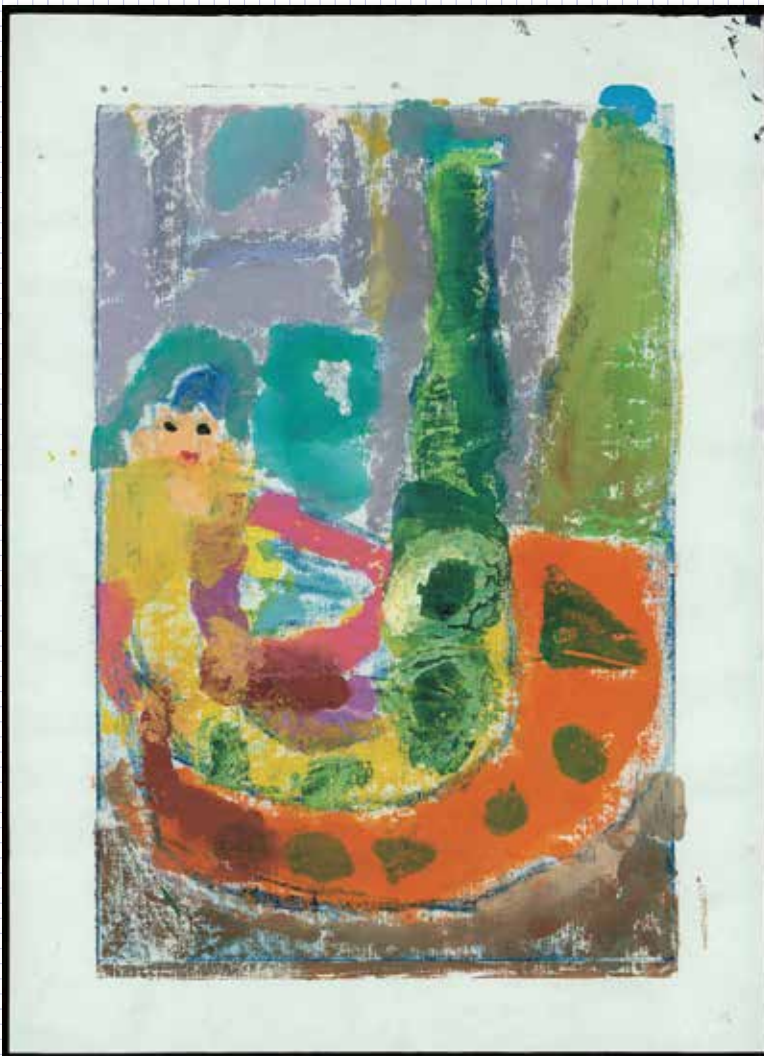
令和7年度/No.425

12/1

Dec. — Jan.

**特集**

運動体験・運動経験・  
レクリエーション



第43回（令和6年度）肢体不自由児・者の美術展入賞作品「ラジオ体操」

山田 剛雅



社会福祉法人 日本肢体不自由児協会

# はげみ



## 特集 運動体験・運動経験・レクリエーション

### 目次 Contents

広場	より良く生きる ～体験と経験と活動と参加～	酒井 康年	2
Sec.1	すべての子どもにとって必要な身体運動の考え方	覚張 秀樹	4
コラム1	日本肢体不自由児協会の療育キャンプ	覚張 秀樹	8
Sec.2	児童発達支援事業所における取り組み	矢部 弘司	11
Sec.3	「動くこと・感じること・つながること」	西野 紀子	17
Sec.4	重症心身障害児（者）施設における取り組み	吉田 雅紀	24
Sec.5	重症心身障害児者入所施設における 作業療法士の取り組み	住田 多恵子	31
Sec.6	さまざまなアクティビティ提供団体の活動現場から	斎藤 義久	38
Sec.7	プールサイドから見てきたもの ～障害のある方と水性活動～	佐藤 好	45
Sec.8	重度身体障害者になった5歳爺が思う 体験・経験・再創生（リクリエーション）	黒澤 淳二	51
コラム2	ユニバーサルフェスタ 活動報告	荒木 暁	56
トピックス	第59回（令和7年度）「ねむの木賞・高木賞」贈呈式		58
	今号の表紙	山田 剛雅	62

# 広場

## より良く生きる 体験と経験と活動と参加

うめだ・あけぼの学園 学園長・作業療法士

酒井 康年

私が好きな食べ物の一つに「トムヤムクン」があります。初めて口にしたのは大人になってからでした。子どもの頃には身近になかった料理なので、食べたときの衝撃はいまでも鮮明に覚えています。「お！ なんだこれは！ これ好き!!」という感覚です。皆さんにも、「初めて出会ったけれど、これ好き!」という体験があるのではないでしょうか。

この感覚は不思議です。私の中にはもともとその嗜好が存在していたはずですが、それを自分で想像したり形にしたりすることはありませんでした。けれども、そのもの・ことと出会った瞬間、「好き」が表面化するのです。つまり、「好きなもの」「好きなこと」は、体験を通してしか見いだせないのではないかと気づきました。まだ経験していないこと・ものを想像することはできません（見て・聞いて知っていることも含めて）。人は出会った体験の中から

しか、自分の好みや価値を見つけれないのだと思います。そう考えると、私たちは多様な体験を積み重ねてきたからこそ、今の自分が形づくられたと言えるのではないのでしょうか。楽しい体験や嬉しい体験、思い通りにならない体験や悔しい体験、つらい体験、すべてが今日の自分につながっているはずです。「過去のすべての失敗と失態を『経験』と呼び直すためにある今日」という詩があります※1。まさにその通りではないでしょうか。

私は1人の大人として、そして1人の親として、子どもたちにはできるだけ豊かな体験をしてほしいと願っています。それは将来、自分の「好き」を見つけ、選択肢を持つようにとの思いからです。「何を選びたいか」と問われたときに、「これしかない」と思っただけでいいのです。少しでも選択肢を増やすこと、それは、将来に向けた意思形成支援の一側面だと考えています。

このことは、支援ニーズの高い子どもたちや、障害のある方々にとっても同じことです。何に支援が必要か？ 経験すること自体に大きな支援を必要としていると言えます。自ら体験にアクセスすることが難しいからこそ、周囲の工夫や専門的な関わりが不可欠になるのです。支援を受けながらも一つ一つ体験を積み重ねていく、それは、将来「で、君は何をしたい？」と聞かれたときに、自分で選択できるように、です。

さて、私は作業療法を専門としています。作業療法には「人は作業を通して健康や幸福になる」という基本理念があります※<sup>2</sup>。ここでいう「作業」とは、ものを作ることに限られません。推し活を楽しむことも、友人との語りも、美味しい食事を味わうことも、すべて作業です。大切なのは、その人にとって意味があり、心が動く活動であることです。この考え方は、ICF（国際生活機能分類）の「活動」と「参加」にも通じます。活動の機会が得られなければ、参加にはつながりません。逆に、たとえ小さな活動であっても、本人にとって心が動く体験であれば、それは参加へとつながり、人生を豊かに彩る力を持ちます。だからこそ、単に活動として「経験を与える」だけでは不十分です。提供される活動に受け身で関わるのではなく、本人が「やってみたい」「楽しい」と感じる体験をどう作るか。そこに、私たち支援者の知恵と専門性が問われているのだと思います。

今回の特集では、一般には活動や体験に制限が大きいと考えられる方々に対して、多様な工夫を凝らし、体験することを支えている実践が数多く紹介されています。運動はもちろん、種々の遊びや生活や活動の工夫、小さな変化を楽しむ工夫、そこには豊かな知恵と工夫が込められています。そして、それらの実践は「活動」と「参加」をつなぐ大切な橋渡しとなっています。そうした実践事例や現場の知見を紹介しながら、皆さんと一緒に「体験すること」「体験を届けること」、何よりも「人生の彩り」となることを考えていくことができれば幸いです。

#### （参考文献）

※1 作詞 GAKU-MC 昨日の No 明日の Yes

※2 日本作業療法士協会 作業療法の定義

<https://www.jaot.or.jp/about/definition/>

